

	七月	三五二機	十月	三二九機
	八月	三六五機	十一月	二七五機
	九月	三六五機	十二月	二九九機
一九四一年十二月末日現有航空兵力六、五七〇機（既成二、五九〇機 同年新造増強三、九八〇機）				

アメリカ海軍は一九四〇年議會において、航空兵力一萬五千機を確保せんとする擴充計畫が通過してゐるので、一九四〇年よりはさらに馬力をかけて空軍建設に邁進することになつてゐる。

一方陸軍の航空兵力は如何といふに、一九四一年初頭の現有勢力は三千六百機内外と推定される。すなはち、一九四〇年八月十五日現在において既に三千二百機を保有してゐたからである。そこで現在の航空機製造能力

から推定して、陸軍機一ヶ月平均三百五十機宛増強されるものと見て一九四一年六月には、アメリカ空軍の勢力は次のごときものと推定せられる。

アメリカ空軍兵力（一九四一年六月）

海軍	四、五八五機
陸軍	五、七〇〇機
總計	一〇、二八五機

もしアメリカが、五、六月頃に『參戰』するとすれば、その航空兵力は陸、海軍合せて一萬機と計算すれば大體間違ひないところであらう。

さてアメリカの航空機生産能力はどの程度のものかといふに、政府の國防強化計畫航空部門においては、軍用機の年産水準を五萬機としてゐた

が、それは生産不可能となつた。国防生産管理局のクヌードセン長官をはじめ関係当局はこの計畫の無謀なることを認識し、年産水準を二萬五千機に引下げ、月二千二百機生産を目標としてゐる。このことは政府当局より議會に通告済みといはれる。

太平洋岸シヤトルのボーイング會社、サンタ・モニカのダグラス會社その他全米の各飛行機製造會社が全力を集中して生産する軍用機が月二千二百機とすれば、假に海軍に三百五十機、陸軍に三百五十機、計七百機を納めても、なほ一千五百機の餘剰を來すわけであるが、これをイギリス、ギリシヤ、重慶その他に振當てても、相當の餘裕を示すことになる。

もつとも、この月二千二百機は恐らく戦闘機を中心としての計算と思は

れるが、ボーイング工場における『空の要塞』ボーイング爆撃機、ダグラス工場で作中の『超重爆撃機』などは戦闘機のやうに、さう易々と出来るものではないから、前記の數字も相當割引すべきものであらう。

しかしドイツの空軍製造能力を見てもわかるやうに、決してアメリカの航空機生産力を甘く見てはならない。殊に飛行機製作に用ひる鋼鐵、銅、アルミニウム、クロム、ニッケル、モリブデン、タンタムステンなどの資源を多量にもつてをり、また人口一億三千萬人による人的労働資源も豊富なのであるから、その飛行機生産力は馬鹿に出来ないのである。

2 渡洋爆撃作戦

アメリカは、東は大西洋、西は太平洋を控へ、北は英領カナダに接し、南はカリブ海、パナマ地帯に續いてラテン・アメリカ諸國と相對してゐる。カナダまたは中南米諸國より攻撃を受けない限りその米本國を爆撃される惧れはない。いかに今日航空機が發達しても、歐洲から大西洋を飛越えてアメリカ本土を空襲し、しかも悠々と再び歐洲に歸つて行くといふやうな『超重爆撃機』はない。いはんや五千哩の太平洋を渡洋して米本土を爆撃することは『冒險小説』ならばいざ知らず、實際には不可能な話である。従つて、アメリカは自國本土の防空といふことには、餘り心配は要らな

い。防空作戦に主力を注がぬ以上、戦闘機はそれほど重要でないのである。これに反し、イギリスは、防空作戦に主力を注がねばならぬ。連日連夜ドイツ空軍の爆撃を受けてゐるのであるから、この防衛作戦として『機敏な戦闘機』多数を必要とする。イギリスからは、アメリカに一萬二千機の戦闘機を注文してゐるのも、これがためである。

アメリカ空軍は戦闘機を中心とする防空作戦よりも、進んで大西洋、太平洋に出動哨戒に當る『哨戒偵察機』、『渡洋爆撃』に重きをおく。すなはち防禦作戦よりも進攻作戦に主力を注ぐのである。このアメリカ空軍の本質を十分に検討する必要がある。

現在アメリカ海軍の哨戒偵察機としてさかんに活躍してゐるのは『コン

ソリデーテッドPBY型長距離偵察爆撃機』である。これは水上飛行艇で海上なら何處でも着水出来る。海洋哨戒艇としては申分ない。しかも一千里馬力發動機二基、全金屬單葉で翼長三十一メートル七二、高さ五メートル六四、積載重量一二、二九五キログラム、最高時速三〇四キロ、航続力六、四〇〇キロといふ長距離飛行に耐へる素晴らしい性能をもつてゐる。

この『コンソリデーテッド哨戒艇』が西南太平洋の各基地に配屬されてゐるばかりでなく、濠洲で十八機、ニュージールランドで六機、シンガポールでは二十機を購入したといはれる。価格は一機當り二十萬ドルと稱せられる。

さらには『マーチン一六二(XPBM-1)哨戒爆撃艇』もさかんに活躍

してゐる。これはライト・サイクロン千二百馬力發動機二基(最高千五百馬力、都合三千馬力まで出せる)を有し、性能は『コンソリデーテッド哨戒艇』に劣らぬ優秀機である。この他『ダグラス哨戒艇爆撃艇』、『ロツクヒード偵察爆撃機』などがある。

重爆撃機には、アメリカ陸軍御自慢の『空の要塞』『ボーイングB-17C型重爆撃機』がある。四發動機(一、二〇〇馬力四基)、航続力三千マイル以上、時速三〇〇マイル、爆弾八千ポンドの搭載力を有する全金屬製優秀機である。この『空の要塞』は、シヤトルのボーイング工場においてさかんに製作されてゐるが、これは、一九三七年『ボーイングXB-15型爆撃機』として陸軍に三十六機納め、非常に好評を博したものを漸次改善し

たものである。

このボーイング會社で汎太平洋航空路に就航してゐる『クリツパー艇』も作る。この『クリツパー飛行艇』は一、〇五〇馬力發動機四基を備へた巨艇で、桑港、ハワイ、ミッドウエー、グアム、比律賓、蘭印をつなぐ航空路を往復してゐる。

また米海軍が『空の戦艦』といつてゐる『コンソリデーターッドXPB2 Y-1型飛行艇』がある。これは前述の哨戒艇の姉ともいふべきもので、一、〇五〇馬力發動機四基を備へ、『空の要塞』に劣らぬ性能をもつてゐる。同じく『空の超弩級艦』といはれる『シコルスキーXPBS-1型哨戒爆撃艇』がある。これもP・Wツイウン・ワस्प發動機一、〇五〇馬力

四基を備へた恐るべき性能の巨艇である。

さらにわれわれが戒心すべきことは、ダグラス飛行機製作會社において建造中の『超重爆撃機』である。アメリカ陸軍は一九四〇年五月二十二日次のごとく發表してゐる。『米國より歐洲まで無着陸で往復し得る世界最大の軍用機を、目下ダグラス飛行機製作會社で建造中である。本年一杯（一九四〇年）には完成の見込である。同機は重量七〇トン、翼長二一〇フィート、四發動機（最高二萬四千馬力を出し得るもの）、航續力は六千マイル、二十八トンの爆弾を積載して平均二〇〇マイルを出し得る性能を有するものである』

この恐るべき『超重爆撃機』は一九四一年には『空の要塞』ボーイング

爆撃機の兄分として太平洋上に現はれるものと見なければならぬ。これらの巨艇、巨機が、數十機、数百機、編隊翼を連ねて、遠征する渡洋爆撃、空中攻撃は、怖るべき威力を發揮するであらう。

しかしながら空軍の渡洋爆撃も、現在のところは行動半径一千マイル、精々一千三百マイル程度と見られる。たとへば、アメリカの『空の要塞』ボーイング爆撃機にしても、航続力は三千マイル、その往復を計算すれば行動半径は一千五百マイルである。いはんや、目的地に到達すれば、當然相手國の戦闘機の邀撃を受けねばならぬ。空中戦闘を演じつつ、爆撃して還るとすれば、行動半径は一千マイル、精々一千三百マイルといふことになる。

われらは太平洋の『地の利』を按ずるに、幸ひにしてアメリカの太平洋前進基地は、日本本土の中心からいづれも一千マイル以上の遠距離にあるすなはち比律賓のマニラから横濱までの距離は一千八百マイルあり、アリュシヤン群島のキスカ根據地から横濱まで二千二百八マイル、ウエーク島より横濱まで一千九百三十マイル、グアムより横濱まで一千五百六十三マイル、ミッドウェー島より横濱まで二千四百九十四マイルある。

かくのごとく距離的に見ても、『アメリカ参戦』するとも直ちに空襲される心配はない。『冒険小説家』は『アメリカ海軍の航空母艦が、日本近海に接近してそこから飛行機を飛ばし、日本本土の中心地を狙ふ』といふが、それは、日本海軍、空軍の健全なる限り、さう簡單に出来る藝當では

ない。餘り神經過敏になつて心配せぬがよい。

しかしながら萬一に備へることは怠つてはならぬ。殊に日本は木造家屋であり、完全防空施設は木造建築の本質上極めて困難である。またドイツ空軍のロンドン爆撃、イギリス空軍のベルリン爆撃を見ても、夜間空軍の襲撃は、事實上において防禦の方法なきことを實戦によつて教へてゐる。

またドイツ空軍が、かつてロンドン空襲に當り一萬箇の焼夷弾を投下した。そのときは煉瓦造り、鐵筋コンクリート造りのロンドンの家屋すらも到るところに大火災を起した事實に徴すれば、われらは餘程の覺悟をもつて防衛に當らねばならぬ。

日本は四面海に圍まれ、攻むるに難く、守るに易き『地の利』を得てゐる

る『天恵の國』である。もし敵國空軍がわが國を襲はんとすれば、渡洋爆撃によるの他はない。その場合、重い爆弾よりも軽い『焼夷弾』、『毒瓦斯』を多量に積載し來つてバラ撒くものと思はねばならぬ。これに對し、國民の一人一人が『國家防衛の重責』を感銘し、慌てず、驚かず、これを處置し、その被害を軽減し、苦痛を忍び、困難に堪へ、もつてこの『尊き祖國』を護らねばならぬ。

第五章 太平洋作戦

1 英米合作の對日布陣

アメリカ海軍の前作戦部長スターリング少將は、大膽にも U・P 通信（一九四〇年十一月十八日）をもつて『日米開戦の場合の太平洋作戦』を發表した。それは大要次のごときものである。

『米國海軍が日本海軍と戦ひを交へる場合、イギリスはその新造艦『キング・ジョージ五世』（三五、〇〇〇トン、主砲十四インチ十〇門、副砲五インチ十六門）級

主力艦四隻を太平洋方面に廻すであらう。米國の太平洋主力艦十二隻と合せて十六隻となる。これをもつて日本の主力艦に對抗する。また蘭印海軍の巡洋艦三隻、驅逐艦六隻、潜水艦二十隻、さらに、濠洲海軍の巡洋艦二隻、驅逐艦五隻、その他新鋭の水雷艇隊も参加するであらう。

對日開戦の場合、米國はグアムを放棄するであらう。この場合、布哇、シンガポールの連絡は、ホノルル、カントン島、ニュー・カレドニア、蘭印、シンガポールと連絡するであらう』

このスターリング前作戦部長の意見には、忘れたのか、故意に黙したのか、比律賓に關して一言も觸れてゐない。しかし、グアムを放棄するといふくらゐであるから比律賓も放棄するであらう。

アメリカが太平洋前進基地を放棄することは、歓迎するところである

が、恐らくはアメリカ海軍はさう簡単に放棄すまい。何故なれば、英米合作の場合、グアム、比律賓、香港、シンガポールの英米基地は、互に連絡をとり、一基地でも失ふことはそれだけ他の基地の防禦力を弱體化するからである。刀折れ、矢盡き、屈するところまでは、放棄しないであらうと思ふ。

さらに海軍に關する問題であるが、イギリスの新造艦『キング・ジョージ五世』級四艦の問題は、ワシントン方面からちよいく放送される。思ふに、アメリカの對英『武器貸與』の代償として、英國新造主力艦『キング・ジョージ五世』級四隻または五隻を、アメリカに引渡す『默契』が出来てゐるのではないかと思はれる。

その證據には『武器貸與案』が、囂々たる論争の中、二月八日（一九四一年）下院を通過、上院に廻付されたが、下院の修正條項中『大統領に對する全權附與の期限は二ケ年とする。軍需品提供の條件、代價代償は全然大統領に一任する』といふことになつてゐる。英國への武器提供は十三億ドルを限度ともいひ、或は二十億ドル、三十億ドルともいはれるが、その代價代償を全然大統領に任せるといふのは、恐らく『議會の秘密會』において、英國新主力艦との交換を持出したか、あるひは太平洋の英國基地租借案か、何れかであり、それを公表することは、現在の國際關係、とりわけ對日關係を刺戟する惧れありとして殊更に公表せずにあるのではないかと思ふ。

濠洲公使、ニュージランド公使、カナダ公使、英大使がしばしば白聖館を訪れつつあるのは、この英米合作による對日作戦に至大の關係ありと見られる。殊に、ハリファックス駐米大使（前英外相）が、わざわざ新造主力艦『キング・ジョージ五世』に搭乗してアメリカに乗込んだには重大な意味がふくまれてゐると考へねばならぬ。

そこで、イギリスの新造主力艦について一應説明しておく必要がある。この新主力艦は、華府條約による建艦制限の効力が失はれた一九三六年十二月三十一日の翌日すなはち一九三七年一月一日に、計畫的に起工されたものである。イギリス海軍は同年相次いで五隻の主力艦を起工した。

艦名	起工年月	トン數	主砲	副砲
キング・ジョージ五世	一九三七年一	三五、〇〇〇	一四インチ二〇門	五インチ二六門
プリンス・オブ・ウェールズ	一九三七年一	三五、〇〇〇	一四インチ二〇門	五インチ二六門
アレンソン	一九三七年一五	三五、〇〇〇	一四インチ二〇門	五インチ二六門
ビリーテ	一九三七年一六	三五、〇〇〇	一四インチ二〇門	五インチ二六門
ジエリコー	一九三七年一七	三五、〇〇〇	一四インチ二〇門	五インチ二六門

〔備考〕 各艦飛行機三機搭載、カタバルト一基

右のごとき偉大な戦闘力をもつ主力艦五隻である。これは一九四〇年末より四一年初頭に全部就航することになつてゐる。この五隻がアメリカ海軍に協力または編入されるとすれば、その威力は相當なものである。アメリカ海軍としても四一年六月までには次の二隻が就役するのである。

艦名	トン數	主砲	副砲	搭載飛行機 (カタバルト 射出機)
ワシントン	三五、〇〇〇	一六インチ三聯裝砲門	五インチ二門	四機
				三基

ノース・カロライナ

五、〇〇〇

一六インチ三聯装九門

五インチ三門

四機

三基

〔備考〕

カタパルトは飛行機を軍艦から射出する機械で、滑走せず壓力によつて飛び出せるやうになつてゐる。

これが太平洋艦隊に加はれば、主力艦は十四隻となる。(主力艦十五隻中、三隻は大西洋艦隊へ編入)さらにイギリスの新鋭主力艦五隻が加はれば、アメリカの太平洋艦隊勢力は主力艦十九隻となり、新造七隻に、『メリーランド級』(三二、〇〇〇トン、十六インチ砲八門)三隻と都合十隻の『主力戦艦』が中心となつて、大膽な渡洋作戦をも決行する肚ではなからうか。

アメリカ艦隊の渡洋作戦は、ブラット提督の作戦計畫といふが、そのブラット提督も、停年引退中であつたのが再び現役に復歸した。彼の作戦、

『リング・フォーメーション』(渡洋輪型陣)をもつて、布哇をあとに、太平洋をひた押しに出るやうな劇的場面を展開するのではなからうかとひそかに思ふ。

2 現代海戦の性格

もし不幸にして『アメリカの参戦』となり、もつれにもつれて、遂に『日米開戦』となつた場合、アメリカ海軍には二つの出方があると思ふ。

その一は、太平洋艦隊を中心に、北はアリューシャン群島よりミッドウェイ、ウエーク島、グアム、比律賓、シンガポールの線に對日包圍の陣型

を取り、主力戦隊は容易に動かさず、日本海軍の動向を注視するといふ作戦である。

その二は、日本の南太平洋作戦の妨害をするため、太平洋艦隊の主力が堂々と南太平洋に進攻し、同時に、英國艦隊、濠洲艦隊と相呼應して、日本の聯合艦隊を挾撃せんとする作戦である。アメリカのアジヤ艦隊が、比律賓マニラに集結待機してゐるのも意味深長である。

前者の作戦を取る場合は、太平洋は戦争の長期化、ゲリラ戦術化する惧れがあり、従つて、アメリカ艦隊自體も、日本の潜水艦の餌食となるであらう。後者の場合は、アメリカ太平洋艦隊は、リング・フォーメーションで出て来るから速戦即決となる可能性が強い。しかしこの場合は、西南太

平洋の諸條件がそろつて来なければ出て来ないと思ふ。その條件は今ここで申上げられない。果してアメリカ海軍はいづれを選ぶか、これはそのときの諸情勢によるが、重大にして興味ある問題である。

しかしながら、アメリカ艦隊の渡洋作戦には幾多の困難が伴ふ。艦隊行動の速力は、遅い船足がその基準となる。いはんや燃料重油の補給、そのための給油船、掃海艇、敷設艦、潜水救難艇、特務艦などの大世帯をひきゐて、しかも日本の潜水艦攻撃にびくびくしながら出て来る進航は容易でない。如何に警戒堅固なリング・フォーメーションといへども、わが潜水艦の襲撃を受けず、無事に無疵で西南太平洋に出られるとは思はれないのである。

このリング・フォーメーションといふのは如何なる陣型かといふに、主力艦、航空母艦、甲級巡洋艦を中心體型として、その前後左右に驅逐艦、乙級巡洋艦、補助艦艇を配し、一大長方形の陣立で渡洋する作戦である。その目的は、主力艦、航空母艦、甲級巡洋艦を損傷させずに、目標地點に到着し、そこで堂々と戦闘を開始せんとするにある。この陣立は、單にアメリカのみならず、各國海軍の渡洋陣型は、みな同じやうなもので、主力艦、航空母艦、甲級巡洋艦を中心に、この主力部隊を驅逐艦その他の補助艦艇が、前後周圍を護衛しつつ進航することは一つの戦闘體型である。それをアメリカ海軍が大がかりに公式化したのをリング・フォーメーション（輪型陣）と銘打つたのである。

この渡洋作戦の途中において、あるひは目的地において、彼我艦隊が遭遇した場合、ここに堂々たる大海戦が行はれることになる。無論航空機の發達してゐる今日であるから、この海戦の前に彼我艦隊の行動は、その哨戒偵察機によつて相互に知るわけである。故に彼我艦隊の遭遇戦といふことは、大體において双方に攻撃精神が燃え、自信のある場合に行はれるものと見なければならぬ。一方が海戦を欲しない場合は、これを回避するであらう。しかしその場合は、優勢海軍が追撃する。これは過去の海戦史の示すところである。

今日の海戦は、その射程距離が決定的にものをいふ。しからば英米の主力艦はどのくらゐの射程距離を有するかといふに、英國主力艦ロードネー、

ネルソンの主砲十六インチ主砲は仰角四十度、最大射程三萬四千メートルである。着弾三萬メートルにおいて、約十インチの装甲板を穿徹することが出来るといふ。またアメリカ主力艦ネヴァダの主砲十四インチ砲は仰角四十度に改装しその最大射程距離三萬五千メートルに及ぶといふ。米海軍の射程は大體次のごときものとなつてゐる。

◇米海軍砲の射程距離

十四インチ以上の大口徑砲	三萬五千乃至四萬ヤード
八インチ砲	三萬乃至三萬五千ヤード
六インチ砲	二萬乃至二萬八千ヤード

この射程距離から見れば、アメリカ艦隊の選擇する砲戰距離は大體三萬ヤード附近といふことになる。三萬ヤードとは如何なる距離か、メートル

に換算して二萬七千四百メートル、里數にすれば約七里である。

彼我兩艦隊、三萬ヤードの距離において、一齊に主砲の砲門を開き、砲撃の火蓋を切る場合、彼我艦隊は互にその姿が見えるかといへば、まづ見えない。一萬トン巡洋艦の檣樓から敵艦隊は見えない。主力艦のトップは高いから遙か彼方に艦體の一部とマストが見えるくらゐのものである。しかも天氣晴朗にして濛氣なく、煤煙、砲煙のないときに限る。かゝる好都合の天候は、太平洋上には一年を通じて幾日もない。最も不良なのは、梅雨期、次で不良なのが三、四月頃の春がすみである。

日本海海戦のときは、東郷長官の大本營宛報告にあるとほり『敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出勤、これを撃滅せんとす。本日天氣

晴朗なれども波高し』で、天気は良かったのである。しかもその砲戦距離は約六千メートルであつた。故に、日、露兩艦隊は互にその全姿全艦隊を現はして戦つたのである。

しかるに、米國海軍の採らんとする砲戦距離は三萬ヤード、すなはち二萬七千メートルである。天気が良くても、相手は見えないのが當然である。地球のカーヴがある以上どうすることも出来ない。しかも砲撃手はこの見えざる相手を砲撃するのだから甚だ頼りない。しかし空軍偵察機によつて着弾の位置は直ぐ報告して来るから——眼は空中の高いところにあると同様である。ここにおいて各國の海軍ともに『彈道學』の研究に重きをおくのである。

話はちよつと横道にそれるが、アメリカの『彈道學』の研究について一言したい。『アメリカ數學會』および『アメリカ數學協會』では、歐洲大戰勃發以來『開戦準備委員會』なるものを設け、『陸、海、空軍の科學、軍備擴張に必須なる數學問題の解決』に當つてゐる。そして力學、流體力學、彈性力學、航空力學、彈道學などの研究に没頭してゐるが、『彈道學』はプリンストン大學高等數學研究所員ジョン・フォンノイマン教授が代表評議員となつてゐる。これらの『開戦準備委員會』の數學者、教授連は、多くドイツの各大學から追はれたユダヤ人教授である點に注意しなければならぬ。

プリンストンには、大學の他に、ユダヤ財閥の寄附で高等數學研究所が

創設せられ、世界一流の数学者が集つてゐる。かの相対性原理で有名なアインシュタイン博士（ユダヤ人）をはじめ、ドイツを追はれた数学教授が集つてゐるので、現在の世界数学の中心はプリンストンだとの定評がある。このユダヤ人数学者達が頭脳を絞つて研究した『弾道学』、『工業数学』、『航空力学』などは決して油断ならぬと思ふ。何故なれば、これらのユダヤの学者達は、その明敏な頭脳で研究を続けつゝ、同時に、ナチスに對する復讐に燃え、その方法として、『アメリカ陸、海、空軍の科学戦術』に『協力』してゐるからである。故にアメリカ海軍の『弾道学』、『弾性力学』、『高等数学』を應用しての『科学戦術』を輕視してはならない。しかしながらこれを怖れることもない。『敵を怖れず、侮らず』、正々

堂々と進むのがわれら神州男兒の本懐である。かの日本海大海戦に當り、東郷長官が旗艦三笠のマスト高く掲げられた『皇國の興廢この一戦にあり各員一層奮勵努力せよ』である。われらは斷じて、太平洋を護らねばならぬ。それはすなはち『祖國日本』の護りである。

第六章 日本國民は自信をもて

つらつらわが日本の國を懷ふに、東は洋々たる太平洋にのぞみ、西は日本海、支那海を経て亞細亞大陸に接し、北は世界の大漁場オホーツク海、ベーリング海を控へ、南は臺灣より比律賓、蘭印、南太平洋に連り、濠洲を睥睨する。亞細亞大陸の東方海上に、北東より南西にかけ四千キロの長きにわたり、幾多島嶼より成立つてゐる『大八洲國』である。

しかも歐洲の中心を距ること東方一萬マイル、北米合衆國より西の方五千マイル、四面環海、天惠の國土である。北は北洋の寒流を受け、南は南

國の潮に洗はれる。温帶圈内にあつて、十分に手を擴げ、足をのばし海洋の恩惠を滿喫してゐる。國土の山川草木また清冽にして豊饒である。海の幸、山の幸、天惠の國、『日出づる國』すなはちわが『日本』である。

肇國以來三千年、萬世一系の皇統を戴き、いまだ外侮を受けたることなく、國威を中外に輝かして來た。かかる純潔の歴史、かかる譽れある民族は、世界にその比を見ない。

かの北畠親房卿は、その著『神皇正統記』において『大日本は神國なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ。我國のみこの事あり、異朝にはそのたぐひなし。このゆゑに神國といふなり。』と誌してゐられる。まことに尊き國といふべきである。

畏くも神武天皇、『六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや』とのたまひ、橿原に天津日嗣の太柱を建てたまひてより二千六百一年、皇統連綿、皇威八紘に輝く。神功皇后は三韓を征し給ひ、豊臣秀吉朝鮮を討つ。國に逆賊あればこれを誅し、忠臣、義士御國を護る。たまたま弘安四年、元、高麗、江南の聯合軍十餘萬、數千の船艦を連ねてわが九州を襲つたが、『神風』大いに起つて數千の船艦を破碎し、十餘萬の大軍西海の藻屑となる。元史に曰く『生きて還る者ただ三人』と。幕府、天下の政事を擅にしたことはあつたが、萬世一系の皇威は嚴然たり、また武士道起り、忠孝の大義あがる。かくて明治維新を迎へ、われら國民は、ひとしく、明治大帝の御聖徳を仰ぎ奉つたのである。

日清、日露の戦役に、忠勇無双のわが兵は、武威を世界に輝かし、列國の心膽を寒からしむ。滿洲事變に國威大いにあがり、産業經濟に一大飛躍を遂げ、世界市場に進出、縦横に活躍す。その造艦、造船技術に至つては世界に優秀を誇り、『科學日本』の譽れは高い。東西文明を融合し、綜合し、調和し、日本文化を建設した日本民族は、いよいよこれから『八紘一字』の精神を現代の哲學とし、科學して、正々堂々と世界に乗出さんとしてゐるのである。このとき、隣邦支那に日貨排斥起り、蔣介石を指導者とする抗日一派の排日、侮日、日に募り、遂に蘆溝橋の一發を導火線として支那事變となつた。皇軍征馬を進めること既に第五年を迎ふ。

一方歐洲の天地には、新興ドイツ、不公正なる國際現勢力の打破、修正を行はんとして起つ。イギリス、現状維持に執着して遂に歐洲大戰起り、イタリア、盟約の義によつてドイツ側に起つて參戰す。ドイツはポーランドを處分し、ノルウェイ、デンマーク、オランダ、ベルギー、リユクサンブル、フランスを席卷し、その傘下に收め、イギリス攻撃に全力を集中してゐるが、いまだ征服するに至らず、歐洲大戰も第三年を迎ふ。

日本は『八紘一字』の精神に基づき、東亞新秩序の建設に乗出し、獨、伊は不公正なる現状を打破、修正を目標とする歐洲新秩序建設に進む。志を同じくする者、お互に手を携へて進まんとするのが『日、獨、伊三國同盟』である。何らやましきところはない。

しかるに、太平洋の彼方、アメリカ大陸に盤踞する米國は、『日、獨、伊三國同盟』を『不神聖同盟』と罵り、イギリスを援助して、ドイツに對抗せしめ、蔣介石を援助して抗日を策謀し、さらに進んでは、自ら、その陸、海、空軍を驅つて、日、獨、伊と覇を争はんとする。その海軍の主力太平洋艦隊を布哇に集結し、アジア艦隊を比律賓マニラに待機せしめ、北はアリユーションより南はグアム、比律賓、シンガポールへつなぐ線に、對日包圍の陣型を備へ、一觸即發の體制を整へてゐるのである。

この險惡なる事態に直面するも、神州健兒、斷じて尻込みはせぬ。望みとあれば正々堂々太刀打をしようではないか。

しかしこの内外の情勢をつぶさに思ひめぐらせば、まことに、わが日本

は、未曾有の一大事に遭遇した。超非常時、一大國難に直面してゐる。四面海にかこまれ、攻めるに難く、守るに易き天恵の地の利を得てはゐるが、今は、昔と異なり、空軍が存在してゐる。大舉渡洋爆撃も困難ではない。空より飛び來る荒鷲は防ぎやうがないのである。

懷ふに、超非常時、國難來るも、それは太平洋の黒潮のうねりのごとき浮き沈みの現はれでもあらう。國の平和にして榮えるときは波の浮上るときであり、國難來るときはその波の沈むときであらう。花開けば散るときあり、花散りて實を結ぶのである。一概に悲觀したものでもない。

一年の中にも春ばかりはない。木枯すさみ霜寒く、吹雪の荒れる冬もある。『冬來りなば、春遠からじ』一陽來復の陽春を迎ふるであらう。敵の

空軍を頭上に迎へる日來りなば、それは、洵に悲しむべきことであるが、如何なる困難、慘苦にも堪へ、如何なる國難も踏み越え、克服して行く逞しい氣力がなくてはならぬ。

ものに紆餘曲折があり、浮沈みがあり、波瀾のあるのが、世の中であり、人の生涯である。幸福な、平和な日ばかり續いては、かへつて人間は退屈し、墮落するであらう。困難にぶつかり、國難に遭遇して、心の底、腹の底から、力一杯の勇氣を出して闘ふのも生甲斐ある人生ではないか。

われわれはかの關東大震災を想起する。あの燒野原となつた帝都は、數年ならずして立派な近代都市として復興したではないか。あの逞しい再建の力、あの偉大なる建設の力を——。或者はいふであらう。あのときは、

米國が金を貸して呉れた、全國の同情援助があつたからだ。しからばドイツを見よ。第一次歐洲大戰においてあの苛酷なるヴェルサイユ講和條約を押付けられ、困苦のドン底に突落されたが、二十年そこそこで、今日あれだけの大戦争が出来るまでに復興したではないか。

日本は斷じて亡びない。日本國民はひとしく自信をもつて起ち上るべきである。困難は來るであらう。未曾有の國難に遭遇するかも知れない。しかし決して絶望することはない、悲觀することはない。もし失望し、悲觀する者あれば、それは弱虫だ。意志薄弱な徒輩だ。日本國民は、斷じて一人として弱虫であつてはならぬ。

畏くも天照大神は、皇孫瓊瓊杵尊に勅して曰く『豊葦原千五百秋之

瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たる可き地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣、寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮無かるべし』と。

天津日嗣のさかえまさむこと天地と共にきはまりなき皇國日本である。

日本は如何なることがあつても斷じて亡びない。日本國民たる者は、如何なる國難に遭遇するとも、徒らに驚かず、慌てず、悲觀せず、絶望せず、腹の底から勇氣を奮ひ起し、『祖國日本』を護らねばならぬ。それはわれら國民に課せられたる肇國三千年來の尊き義務である。

昭和十六年三月二十日印刷
昭和十六年三月二十五日發行

定價八十錢

不許
複製

大阪市北區中之島三丁目三番地

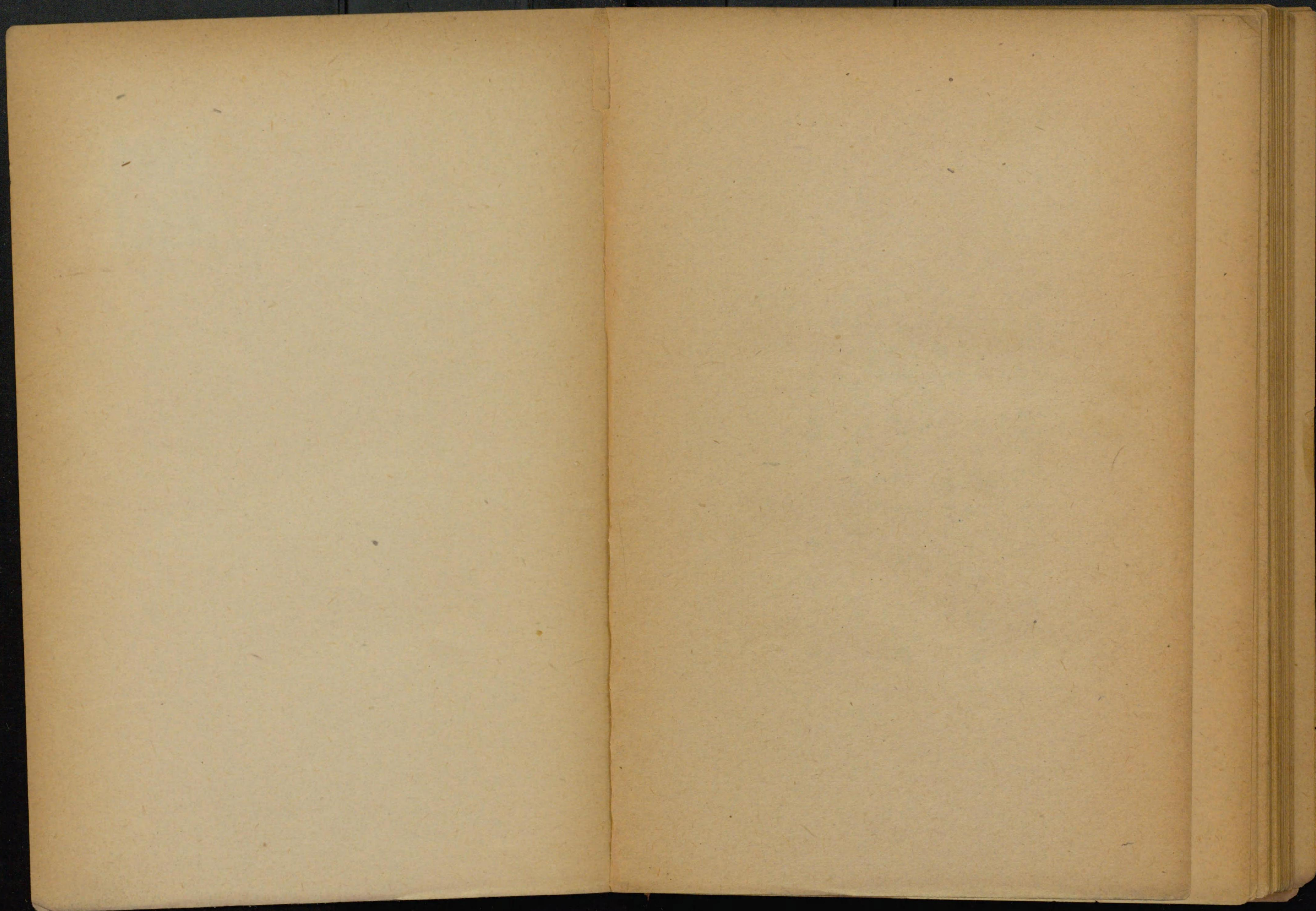
朝日新聞社

編輯兼發行印刷者 樋口正徳

大阪市北區中之島三丁目三番地

印刷所 朝日新聞社

發行所 大阪市北區中之島三丁目三番地 株式會社 朝日新聞社





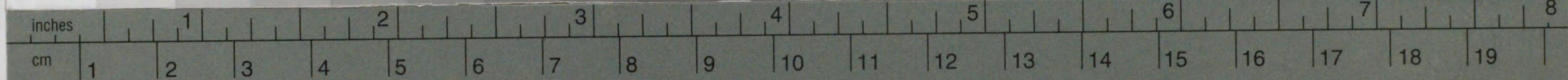


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

